

TABP の構造について

塹江 清志, 水野 和夫*, 塹江 光子**
システムマネジメント工学科
(1997年 8月26日受理)

The Structure of TABP

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO* and Mitsuko HORIE**
Department of Systems Management and Engineering
(Received August 26, 1997)

The purpose of this paper is to discuss the structure of TABP (Type A Behavior Pattern).

The concept of TABP was advocated as one of 3 critical factors in CHD (coronary heart disease) by Friedman and Rosenman.

It has been demonstrated by many researches that TABP as a "behavior pattern" comprises 4 behavioral characteristics, i.e. "extremely strong achievement motivation", "struggling and striving", "time urgency", and "hostility and aggression".

As a result of discussing the structure of TABP by discussing the interrelationship and the basic mental structure or personality traits of the above 4 characteristics, the following results were obtained.

1. Behavioral characteristic of "extremely strong achievement motivation" causes the remaining 3 behavioral characteristics.

2. Behavioral characteristic of "extremely strong achievement motivation" derives from "helplessness" as mental structure or personality trait.

Furthermore a relationship between "helplessness" and "sense of basic mistrust" is suggested.

It is concluded that future researches is required to detect this relationships above mentioned.

本論文の目的は、TABP (タイプA 行動型) の構造を検討することである。TABP 概念は、Friedman と Rosenman によって、CHD (冠状動脈心疾患) の3大危険因子の1つとして提唱された。これまでの多くの研究によって、行動型としてのTABPが、4つの行動特性、すなわち、「異常に強い達成欲求」、「奮闘・闘争」、「時間的切迫感」、そして、「敵意・攻撃」から成ることが明らかにされてきた。

4つの行動特性間の相互関係、そして、それらの基盤となる精神構造、性格特性の考察を通してTABPの構造を検討して以下の結果を得た。

1. 「異常に強い達成欲求」が、残りの3つの行動特性を生ぜしめている。

2. 「異常に強い達成欲求」は、精神構造、性格特性としての「無力感」から由来している。

更に、「無力感」と「基本的不信感」との関係が示唆され、今後の研究によってこの関係が明らかにされるべきであると結論された。

1 TABP 概念

1.1 TABP 概念の導出

1.1.1 導出過程

(1) CHD の精神医学的研究

近代精神医学の創始者である Dumber, F. が「身体疾患に罹りやすい固有の性格特性の存在」を認識し、そして、CHD (Coronary Heart Disease; 虚血性心疾患、冠状動脈心疾患) 患者について「野心的・攻撃的・精力

*愛知技術短期大学 **岐阜教育大学

的で仕事が多い」という特性を発見したことが、CHDの精神医学的研究の開始である(保坂^[1])。

1930年代の米国の精神医学が方法論においてFreudの精神分析学が主流であったことによって(保坂^[1], 西松^[2], 福西^[3]), 1930年代の米国においては, CHD患者の心理, 精神, 性格, 行動特性の研究が, 精神分析的に遂行された。Friedman, M.ら^[4]は, CHDの原因としての社会心理的要因に関する精神分析学的研究を開始した。

その成果として, Dumber, F.は, 慢性関節リウマチに「リウマチ性格」を, そして, CHD患者に特異的に見られる性格特性として“Coronary Personality”を見出した。Menninger, K.らは, 心臓疾患患者の精神分析学的研究を通じて「抑圧された敵意性(suppressed hostility)を見出した(保坂^[1])。その後, 精神分析学的手法によってCHDに関する心身医学的研究が多くなされたが, 結果は一義的ではなかった。

1940年代以降米国で台頭して来た行動科学とそれと相まわりの精神分析学的研究への批判は, CHDの行動科学的研究を生起せしめた。Friedman, M. and Rosenman, R.H.^[4]は, CHD患者に特有の一連の「行動型(Behavior Pattern)」を「タイプA行動特性(型)(Type A Behavior Pattern: TABP)」と命名し, ここに「TABP概念」を生成せしめたのである。彼等は, TABPは, Dumber, F.の“coronary Personality”, Meninger, K.らの「抑圧された敵意性」に相当するものとしている。

(2) TABP概念の創唱

1) TABP概念の創唱

TABPは, Friedman, M. and Rosenman, R.H.^[7]によって導出され, 創唱されたが, 彼等は以下のことを主張したのである(桃生^[5])。

CHDの原因は, 「職業的・社会経済的ストレスによる血清コレステロール値の増大, 血液凝固時間の短縮」である。そして, 「ストレス(ストレス因)→医学的・生理的反応(→CHD)」の関係を増大せしめるように機能する「要因・変数」が「TABP」である。

ここに, 「TABP概念」が創唱されたのである。

2) TABP概念創唱の意義

TABP概念創唱の意義を以下のように要約できる(前田^[6])。

1. CHDの新しい危険因子の導出

2. 「心理的要因」の導出

CHDという「身体の病気」の「予見因(predictor)」として「TABP」という「心理的要因」を導出したことは, 医学史上最初のことである。

3. 「行動型(behavior pattern)」として同定したことによって1つの「人間観」を表現したこと。人間の在り方が, 個人の性格, 体質から由来する心理社会的環境への適応の仕方によって決定されるということ。

4. 「性格」としてではなく, 変容可能な「行動型」として同定したことによって治療の可能性を見出したこと。

5. 心身医学における研究方法の重点が, 精神分析学的方法から行動科学的方法に移行したこと。

1.1.2 CHDの危険因子としてのTABP

(1) TABPについての研究成果

1) WCGSの研究成果

米国におけるCHD研究グループの1つであるWCGS(Western Collaborative Group Study)の研究は, Friedman, M. と Rosenman, R.H.によって1960年にサンフランシスコ湾岸域の11の企業における3,500名以上に中年男性社員を対象にしてのCHD発生率に関する長期間にわたる予測疫学的研究(追跡研究)として開始された(黒田^[7])。成果は以下のように要約できる(Davidsonら^[8])。

1. 調査対象者3,267名中臨床的に明らかにCHDを示す者113名中「TABP者(TABPの行動型を示す者)」が80名で, 残り33名は「TBBP者(TBBPの行動型を示す者)」であった。(TABPの行動型と正反対の行動型をTBBP(Type B Behavior Pattern: タイプB行動型)という。)

2. CHDの危険因子としての「血液凝固時間の短縮」, 「ノルエピネフリン(norepinephrine)の分泌の増大」, 「ベタリポプロテインズ(beta lipoproteins)の増大と血清コレステロール値の増大」のいずれにおいてもTABP者は, TBBP者よりもその傾向が大であった。

1975年に発表された8年半にわたる追跡研究の成果は以下のように要約できる。

8年半の期間にCHDの症状が進行した257名中, 178名がTABP者で, 79名がTBBP者であり, 178対79=2.37対1であった。心筋梗塞再発に関してTABP者とTBBP者との比率は, 5(TABP)対1(TBBP)であった。

2) 他の研究での成果

他の研究での成果を要約すると以下ようになる。

1. TAC-PB(Type A Coronary-Prone-Behavior: 冠動脈心疾患になりやすいタイプA行動)は, CHDの有意な予測因子(predictor)である。

2. CHD発症の危険度は, TABP者は, TBBP者の

約2倍である。

3. CHD発症の危険因子として従来から指摘されて来た「喫煙」, 「緊張過多 (hypertension)」, 「高コレステロール値」の3大因子の他にTABPの1つの独立した危険因子として指摘できる。

(2) CHDの危険因子としてのTABP

TABPが、1つの独立したCHDの危険因子であることが明らかになったことから、CHDの「危険因子 (risk factor)」(coronary risk factor)として、現在では、以下のような因子を指摘できる。

1. 体質的, 遺伝的な危険因子 — 年齢, 性, CHD家族歴, 性格
2. 疾病 — 高血圧症, 高脂血症 (高コレステロール血症), 糖尿病, 肥満, 心電図異常, 動脈硬化
3. 生活習慣 — 喫煙, 運動, コーヒー, アルコール
4. 心理社会的因子 — TABP

保坂ら^[9]は、上述されたCHDの危険因子の中で3大危険因子として「高血圧症」, 「高脂血症」, 「喫煙」を指摘し、「TABP」はこれらの3大危険因子とは独立した危険因子であるとしている。

黒田^[7]は、米国での国立心臓・肺・血液研究所での専門家会議で検討した結果、1981年に、TABPがCHDの重要な危険因子であり、前述の3大危険因子より危険な因子であると結論されたこと述べている。

(3) 第1位の死因としてのCHD

1989年9月1日付の高知新聞の「主な死因の将来予測」で、1986年(実測死亡数)の死因の第1位は「ガン」, 第2位「心疾患」, 第3位「脳血管疾患」であった。1990年(推測死亡数)の場合は、1986年と同じであった。1995年, 2000年では、1位「心疾患」, 2位「ガン」, 3位「脳血管疾患」であった。ここからも、CHD研究の現代人にとっての意義の重要性が分かる。

1.1.3 CHDの機制

Jenkinsら^[10]は、動脈硬化(症), CHDの機制について以下のように述べている。

ストレス因が、神経系の機能に「媒介・仲介」されて疾患を生ぜしめるわけであるが、ストレス因が中枢神経系に対して「過剰な興奮」を生ぜしめ、「それ」がCHDを生ぜしめる。

1.2 TABP概念

1.2.1 TABPという言葉

この言葉は、Friedman, MとRosenman, R.H.の2人の開業医(心臓医)による造語であり、CHDの発症因

になる「特有の一連の行動様式と潜在的な心理傾向」を示す言葉である(黒田^[7])。

1.2.2 TABPという概念

TABPという概念について以下のことが云える(福西^[3], 黒田^[7])。

1. 行動科学的用語であり、根底に種々の精神医学的概念を含む。その1つとして「抑うつ」を取り巻く種々の概念を指摘できる。心理学的概念と精神医学的概念の混在した複合的な概念である。
2. 行動特性を意味する用語である。つまり、事態、状況によって生じられる行動特徴であり、人格心理学の分析で伝統的に使用されてきた類型論、特性論に基づく用語ではない。
3. 性格傾向として捉えていくことも可能である。つまり、TABPという行動特性のある状況下で生ぜしめやすい性格傾向という形でこの行動特性を捉えることも可能である。最近の傾向として、TABP者に共通してみられる人格特性を従来の人格心理学の用語で捉える傾向が顕著である。

1.2.3 TABPの定義

Friedmanによれば、「より多くをより短時間に達成しようと激しく慢性的持続的な奮闘を行い、ときには必要とあれば、他の事物、あるいは、他人の反対に逆らっても行動する人々において示される行動感情複合」とのことである(Kobasa^[11])。

一言で云えば、「異常に強い「達成欲求」に基づく「奮闘 (struggle)」、あるいは、「闘争 (striving)」の行動傾向」ということになる。行動傾向を支配する、あるいは、動機づける心理的基盤、あるいは、根源的な欲求が「達成欲求」であり、それが異常に強いということがTABPであると考えられる。

1.2.4 TABPの行動特性

諸家(Friedman, M. and Rosenman, R.H.^[4], Jenkinsら^[10], Kobasa^[11], Bringlemら^[12])の記述、そして、これまでなされて来たTABPに関する多くの研究結果からTABPの行動特性を要約すると以下ようになる。

諸々の行動特性を大別すると4群に分けられるが、各群を概念化し、諸特性を各群の下位概念として対応させると以下ようになる。

1. 「達成欲求」 — 達成欲求, 巧名心, 野心
2. 「奮闘・闘争」 — 活動性, 熱中性, 没入性, 競争性, 過敏性, 緊張性
3. 「時間的切迫感」 — 時間的切迫感, 短気, ゆとり
りのなさ, 休みのなさ

4. 「攻撃・敵意」 — 攻撃性, 敵意

上述のことから TABP の行動特性を一言で云えば, 前 (1.2.3 TABP の定義) に述べたように, 「異常に強い「達成欲求」に基づく「奮闘・闘争」の行動傾向」であるとなる。

2 TABP と「無力感」との関係

2.1 TABP と「無力感」との関係

TABP の行動特性を一言で表現するなら, 前 (1.2.4 の「TABP の行動特性」) に述べたように, 「異常に強い「達成欲求」に基づく「奮闘・闘争」の行動傾向」である。TABP 者の「異常に強い「達成欲求」」は, 彼の精神構造における「異常に強い「無力感」」の存在を想定すれば理解できる。何故ならば, 「それ」が存在するが故に, その補償としての「異常に強い「達成欲求」」が生成されると考えられるからである。

Krantz ら^[13] も「TABP 者は, TBBP 者に比べて「無力感」が強いので, 「環境に対する統制・支配の喪失を避けるため, 絶えず闘争する (すなわち, 「達成欲求」充足の為に闘争する)」と述べている。

ここに, 「TABP と「無力感」」との関係が想定されるのである。

2.2 疾病の因としての「無力感」

Green ら^[14] は, ある一定期間の「抑うつ (depression)」状態の持続は CHD による「突然死」を生ぜしめるとしている。また, Krantz ら^[16] は, 「無力感」を定義する行動的特徴が, 「抑うつ」の徴候に類似していると述べている。とすれば, 「無力感」の状態は, CHD を生ぜしめることになる (Seligman^[15])。

とすれば, 「TABP と CHD との関係」から, 「TABP と「無力感」」との関係」が想定される。

前述 (2.1 の「TABP と「無力感」」との関係) のことと今ここで述べたことから, 改めて「TABP と「無力感」」との関係」について, 「TABP 者は, その精神構造において, TBBP 者よりも「より強い「無力感」」を所有している」という考えが導出できる。

3 TABP と学習性無力感効果との関係について

3.1 「学習性無力感」仮説

Seligman ら^[15], Glass ら^[16] は, 「環境を統制・支配 (control) することに対する成功・失敗の経験は, その個体 (生活体) をして, その後の生活において出会う望ましくない事象・状況 (aversive events) に対する「行動的」, そして, 「心理的・生理的」反応 (いわば, 行動

傾向として具体的に表現される「性格特性」とでもいうべきもの, より具体的には, 後述するように「無力感 (helplessness)」を学習し, 形成させると述べている。そして, Seligman ら^[15] は, 「学習性無力感 (learned helpness)」仮説, すなわち, 「統制・支配することが不可能なストレス (厳密には, ストレス因, もしくは, ストレッサー (Stressor)) にさらされた (を経験した) 生活体は, そのストレス因を阻止, あるいは, 終息せしめるのに有効な行動 (responding) はありえないという認知・認識, あるいは, 考えをもつに至る (したがって, 生活体は, その後の生活状況において, そのような状況に遭遇したときには, 「無反応 (無為, 無策)」となり, いわゆる「無気力」な状態を呈する。)」という仮説を主張している。

3.2 「学習性無力感」効果

「無力感」学習の効果は, 「事象の原因の所在についての考え方, すなわち, 「帰属感 (帰属意識)」 (Locus of Control)」を, 原因を自己の外部に求めるという姿勢, 考え方 (External Locus of Control) にし, 原因の追求において, 「他 (外) 罰的」にし, 生活体を「回 (逃) 避行動」に導くという効果であるという。今述べた「学習性無力感」の効果の考えを「逃避反応 (escape response)」を学習する実験状況 (escape learning) に適用すれば以下のように考えられると Krantz らはいう。

「強化 (reinforcement)」に関する期待が小である場合 (前述の文脈では, ストレス因を統制・支配することが困難であると認知・認識・判断される場合), 生活体は, 以前に学習し, 形成された「学習性無力感」を発動させるので, 対処行動としての反応を発動させない。したがって, この場合は, ストレス因を終息せしめるのに適切な反応である「逃避反応」を発動させない。故に, 逃避学習の形成が阻害される。

つまり, 「学習性無力感」は, その後の「道具的反応」の学習を妨害・阻害する。これを「学習性無力感」効果と呼ぶ。

3.3 「学習性無力感」効果の実証

Seligman ら^[15] は, 前述の「学習性無力感」効果を, 人間, 霊長類を使用しての実験において実証している。これらの実験において, 被験体は, ストレスフルな刺激状況に直面したときに, より強い「学習性無力感」効果を顕在化させたという。

3.4 TABP と学習性無力感効果の関係について

前述 (2 の「TABP 「無力感」」との関係) したような, 「TABP 者の TBBP 者に比べてのより強い「無力感」

を実証するための1つの方法が「学習性無力感」効果の検討によるものである。

このことについてのKrantzら^[13]の考え(仮説)を要約すると以下ようになる。

1. TABP者は、TBBP者に比して、「無力感」が強い。(したがって、その補償としての「達成欲求」が強い。)それで、「環境に対する統制・支配(欲求が強いので)の喪失(をより強く恐れるので)を避けるため、絶えず闘争する。」
2. したがって、実験的学習状況において「統制・支配」の喪失を回避するために、より大なる努力を行使する。
3. 最初の学習状況が個体の側の努力によって統制・支配することが可能であるときには、「学習性無力感(“Learned Helplessness”以後LHと略記する。))」は形成されないの、後の学習状況での学習成績は、TABP者の方が「奮闘・闘争」の行動傾向の故に、TBBP者よりも良好となる。
4. しかし、最初の学習状況が統制・支配することが不可能なストレス因に対する統制・支配を学習するという状況ならば、TABP者は行使される努力が大であるが故に、TBBP者よりも大なる「LH」が学習・形成され、後の学習状況でより大なる「LH効果」が顕現する。

3.5 Krantzら^[13]の研究

Krantzら^[13]は、今述べた論理の下に「TABPと「無力感」との関係」を「LH効果」の検討を通して実証している。彼等の研究を要約すると以下ようになる。

最初の実験(pretreatment)では、ストレス因としての「雑音(noise)」の水準を2水準(107db, 78db)、すなわち、ストレス因の強度が「大」(107db: high)と「小」(78db: moderate)(一般には、107dbでの「雑音」は「不快感」を生ぜしめるが、78dbの「雑音」は、「不快感」を生ぜしめないとされている。このことはこの研究でも確認されている。)、ストレス因からの「逃避」が「可能」、「不可能」(個体(被験者)側の努力によってストレス因を「統制・支配」することが「可能」、「不可能」)の2条件を設定している。そして、「ストレス因の強度」と「逃避条件」との組合せによって、 $2 \times 2 = 4$ の4つの条件を設定している。

次の実験(test phase)では、ストレス因としての「雑音」は2水準(107db, 78db)設定し、ストレス因からの「逃避」は「可能」である。

そして、以下の結果を得ている。

- (1) pretreatment での結果
 - 1) ストレス因の「不快さ」

1. ストレス因の強度が「大」である方が、「大」
2. ストレス因からの「逃避」が「不可能」が「大」
- 2) 「無力感」

ストレス因からの「逃避」が「不可能」が「大」

- (2) test phase での結果

- 1) 反応潜時

最初の実験でストレス因からの「逃避」が「不可能」であった場合の方が「大」、すなわち、学習成績が「不良」であった。ということは「LH効果」が存在したと云える。

- 2) 学習達成に対する所要試行数

1. 最初の実験でストレス因からの「逃避」が「可能」であった場合、すなわち、「LH」が学習・形成されなかったと考えられる場合

〈1〉 「可能」条件の方が、「不可能」条件よりも「少」、すなわち、学習成績が「良好」ということは、「LH効果」が認められたことを意味する。

〈2〉 TABP者の方が、TBBP者よりも「少」、すなわち、学習成績が「良好」ということは、前述の「仮説」が実証されたことを意味する。

2. 最初の実験でストレス因からの「逃避」が「不可能」であった場合、すなわち、「LH」が学習・形成されたと考えられる場合

〈1〉 第2の実験でストレス因の強度が「大」である条件では、TABP者の方が、TBBP者よりも「大」、すなわち、学習成績が「不良」ということは、TABPの方が「LH効果」が「大」であることを意味し、前述の「仮説」が実証されたことを意味する。

〈2〉 第2の実験でストレス因の強度が「小」である条件では、TABP者の方が「少」、すなわち、学習成績が「良好」

3. 最初の実験でストレス因からの「逃避」が「可」、「不可」の条件に関係なく、第2の実験でのストレス因の強度が「小」の場合は、TABP者の方が学習成績良好

以上のKrantzら^[13]の研究結果から以下の結論を導出できる。

1. 「LH」が学習・形成されなかったと考えられる場合は、TABP者の方が「成績」が「良好」である。このことは、Krantzら^[13]の「仮説」と一致する。したがって、「TABP者の「無力感」の強さ」を想定することは妥当である。
2. 「LH」が学習・形成されたと考えられる場合は、TABP者において「LH効果」が顕現するのは、

その時点での学習状況でのストレス因が「大」なるときのみである。ストレス因が「小」である場合は、むしろ「成績」が「良好」である。このことは、彼等の「仮説」と部分的に一致しない。しかし、「TABP者の「無力感」の強さ」の考えを損うものではない。

以上のことから、前述(2の「TABPと「無力感」との関係)の結論「TABP者は、その精神構造において、TBBP者よりも「より強い「無力感」を所有している」は認められたと云える。

4 TABPの構造

4.1 TABPの行動特性

前(1.2.3の「TABPの定義)に、TABPを「異常に強い「達成欲求」に基づく「奮闘(struggle)」、あるいは、「闘争(striving)」の行動傾向」とし、TABPの行動特性(1.2.4の「TABPの行動特性)を「奮闘・闘争」,「時間的切迫感」,「攻撃・敵意」の3群にまとめて表現した。

4.2 TABPの構造

そして、2の「TABPと「無力感」との関係」、3の「TABPと学習性無力感効果との関係について)において、「TABP者は、その精神構造において、「より強い「無力感」を所有している」と論じた。

TABPがあくまでも「行動特性」として捉えられている以上、それを示す、あるいは、それを所有する個人の「精神構造」、あるいは、「性格特性」を同定し、両者の関連、及び、TABPの内的構造(内的関連)を明らかにすることが1つの課題であると考ええる。

4.2.1 TABPの基盤としての「無力感」

著者は、TABPという「行動特性」の所有者の「精神構造」、あるいは、「性格特性」として「無力感」を想定するものである。この理由、及び、「TABPと「無力感」との関係)については、前述(2の「TABPと「無力感」との関係)した。

前述したように、「異常に強い「無力感」が「異常に強い「達成欲求」を導出し、「これ」がTABPの行動特性を生ぜしめると考えられるからである。

4.2.2 TABPの構造

(1) 「奮闘・闘争」

「異常に強い「達成欲求」は、当然、「激しく慢性的持続的な「奮闘・闘争」を生ぜしめる。

(2) 「時間的切迫感」

「達成欲求」の充足度は、「達成度」によって規定されるが、「達成度」は「所要時間」によって決定される。したがって、「出来る限り短時間」での「達成」が志向されるわけで、常に「時間に追われる」という感覚、すなわち、「時間的切迫感」に基づく行動を生ぜしめる。

(3) 「攻撃・敵意」

「達成欲求」の強さは、「達成」を妨げる障害物(事物、人)によって「欲求不満(Frustration)」の強さに変換される。フラストレーション反応の1つである「攻撃・敵意」は、当然その障害物に対して指向される。

以上のようにTABPの構造を理解できる。

5 「基本的不信感」とTABPとの関係

TABPの精神構造(性格特性)、すなわち、TABPの行動特性の所有者の精神構造(性格特性)として「無力感」を同定したが、次の課題は、この「無力感」を如何に理解するかである。

5.1 Eriksonの「精神発達漸成論」

エリクソン(Erikson, E.H.^{[17])の「精神発達漸成論」はあまりにも有名である。彼は「死」(の「達成」・「受容)を人生の目標とし、この目標・課題を達成するための条件が「精神的成熟」であるととした。この「精神的成熟」は、個々人の「出生」以来「死」に至るまでの全人生、全生涯を通して「漸成的」に達成されるものであると考えた。したがって、「精神発達漸成論」とされるのである。彼は人生を8つの時期・段階に区分し、各段階で要求される「精神的成熟」を達成することが、次の段階での「それ」の達成の前提条件になると考えた。人生の各段階には、個々人に共通するその段階固有の「心理社会的問題状況」が存在し、それは個々人の精神発達に対して「危機的問題」を出現せしめる。個々人はその問題を解決することによってその段階での「精神的成熟」を達成しうる。そして、8つの(発達)段階の各々において達成されるべき「精神的成熟」を「基本的心理社会的態度(the basic psychological attitude)」という概念で同定し、これを達成・獲得することによって、「一定の精神的な「力」(あるいは「強さ」)が、培われるとし、「それ」を「基本的徳性(basic "virtue")」と呼んだのである。}

5.2 「基本的信頼感」

エリクソンの区分した人生の8つの時期・段階の最初(第1)の時期・段階が「乳児期」であり、生後1年間位までの時期を指し、人生の原点ともなる時期である。

この時期の個々人の人生にとっての重要さは言うまでもない。この時期での「精神的成熟」の達成における失敗は、次の時期での「それ」の達成の前提条件の喪失を意味し、ということは、「それ」の達成の挫折を意味し、究極的には人生の全ての時期における「精神的成熟」の達成の挫折を意味するからである。

この時期において達成さるべき「精神的成熟」の内容とでもいうべき「基本的心理社会的態度」は「基本的信頼感 (sense of basic trust)」である。

人間が、生後1年間位は全く「無力」な存在であり、彼の「全存在様式」が、現実的、そして、具体的には専ら「母親」を主役とする育児者達の「養育態度」に文字通り、「全面的」に「依存」することは明らかである。

乳児にとってこのような状況は、彼の存在における「危機的状况」であることは言うまでもない。この状況において、彼に対する「養育態度」が適切ならば、彼は「自己自身」と「世界」に対する「基本的信頼感」を獲得し、もってこの時期における「精神的成熟」を達成するという。

乳児にとって、「母」を主役とする「育児者達」は「世界の全て」である。したがって、彼等の乳児の「全存在様式」に対する「基本的」には「肯定的」な「養育態度」は、乳児をして、「自己自身」に対する「信頼感」(すなわち、「自己という存在は、この世に存在することを許された存在である」という「感覚」、換言すれば、「自己存在」に対する「肯定・確信」感)と「世界(ひいては、「他者」)に対する「信頼感」(すなわち、「この世(の人)」は自己の「生・存在」を「肯定する、脅やかさない」という「感覚」)とを獲得せしめるという。

また、前述のような「養育態度」は、乳児をして一種の「万(全)能感」を獲得せしめると考えられる。何故ならば、前述したように、「全く無力なるが故に、全在様式を育児者達に全面的に依存する」ので、適切な養育態度の下では「欲すれば、満たされる」という状態が現出するからである。

5.3 「基本的不信感」

エリクソンは、「精神的成熟」の内容としての「基本的心理社会的態度」の獲得に失敗・挫折した場合に形成される「負的」な「態度」についても言及している。この場合の「態度」は、「精神的成熟」とは反対の方向であり、人生、社会的適応にとって「不利」な方向に機能するので「負的」なのである。

乳児期において前述の「基本的信頼感」の獲得に失敗したときに形成される負的な態度が、「基本的不信感 (sense of basic mistrust)」であるという。その内容は、

前述の「基本的信頼感」の「それ」とは正反対のものである。すなわち、「自己自身」に対する「不信感」と「世界」に対する「不信感」である。そして、「万(全)能感」に対して、「無力感」を考えることができる。

5.4 「基本的不信感」とTABPとの関係

前(4.2.1の「TABPの基盤としての「無力感」)に、TABP者の精神構造、性格特性として「無力感」を想定した。そして、今、「基本的不信感」の内容の1つとして「無力感」を指摘した。この2つのことから、「基本的不信感」を精神構造、性格特性に所有する個人は、TABPを顕現させると考えられる。したがって、TABP者が、「基本的不信感」を所有することは十分考えられることである。もし、そうであるなら、TABP者の行動特性の1つである「攻撃・敵意」は、「基本的不信感」の内容の1つである「世界(ひいては、「他者」)に対する「不信感」から「直接的」に由来することも考えられる。前(4.2.2(3)の「攻撃・敵意」)に、TABP者の行動特性の1つである「攻撃・敵意」を、「無力感」からの「達成欲求」、そして、その「達成欲求」阻害による「怒り」からの「攻撃・敵意」と説明した。しかし、TABP者の「攻撃・敵意」が必ずしも「達成欲求」と直接的にかかわらない状況で出現することを考えると、彼の「攻撃・敵意」を「基本的不信感」から説明した方が理解しやすい。

以上のことから、「基本的不信感」とTABPとの関連がここに想定される。

6 結 論

これまでのことから、TABP者の精神構造、性格特性として「基本的不信感」が予想された。したがって、両者、すなわち、「TABP」と「基本的不信感」の間の関連を検討することが次の課題である。

参 考 文 献

- [1] 保坂 隆：「タイプAから敵意性・攻撃性へ」、タイプA, pp.50-53, Vol.4, No.1, (1993)
- [2] 西松能子：「A型行動パターンと前うつ性格—精神科医の立場から—」、タイプA, pp.32-37, Vol.4, No.1, (1993)
- [3] 福西勇夫ら：「タイプA行動パターンの日米比較研究」、タイプA, pp.11-15, Vol.4, No.1, (1993)
- [4] Friedman, M. and Rosenman, R.H.: "Association of Specific Overt Behavior Pattern with Blood and Cardiovascular Findings Blood Cholesterol"

- Level, Blood Clotting Time, Incidence of Arcus Senilis, and Clinical Coronary Artery Disease", J. A. M. A., pp.96-106, Vol.169, No.12, (1959)
- [5] 桃生寛和：「定期的に職業上のストレスに曝される男性における血清コレステロールおよび血液凝固時間の変動」, タイプA, pp.61-66, Vol.1, No.1, (1990)
- [6] 前田 聡：「タイプA行動パターン」, 心身医学, pp.517-524, Vol.29, No.6 (1989)
- [7] 黒田聖一：「タイプA行動パターンの判定方法」, タイプA, pp.5-17, Vol.1, No.1, (1990)
- [8] Davidson,M.J. et al.: "Type A Coronary-Prone Behavior in the Work Environment", J.Occup. Med., pp.375-383, Vol.22, No.6, (1980)
- [9] 保坂 隆ら：「A型行動パターンと虚血性心疾患—質問票の作成」, 心身医, pp.24-30, Vol.24, No.1, (1984)
- [10] Jenkins,C.D., Rosenman,R.H., and Friedman, M.: "Development of an Objective Psychological Test for the Determination of the Coronary-Prone Behavior Pattern in Employed Men", J. chron. Dis., pp.371-379, Vol.20, (1967)
- [11] Kobasa,S.C., Maddi,S.R., and Zola,M.A.: "Type A and Hardiness", J. Behavioral Medicine, pp.41-51, Vol.6, No.1, (1983)
- [12] Bringlam,D. and Hailey,B.Jo.: "The Time-Urgency of the Type A Behavior pattern: Time Pressure and Performance", J. appl. soc. psychol., pp.425-432, Vol.19, No.5, (1989)
- [13] Krantz,D.S. et al.: "Helplessness, Stress Level, and the Coronary-Prone Behavior Pattern", J. exp. soc. psychol., pp.284-300, Vol.10, (1974)
- [14] Green,W.A. et al.: "Psychological aspects of sudden death: A preliminary report", Archives of Internal medicine, pp.725-731, Vol.129, (1972)
- [15] Seligman,M.E.P.: "Fall into helplessness", Psychological Today, pp.43-48, June, (1973)
- [16] Glass,D.C. et al.: "Urban stress: Experiments on noise and social stressors", New York: Academic Press, (1972)
- [17] Erikson,E.H. (小比木啓吾訳編): "Psychological Issues-Identity and the Life Cycle (「自我同一性」)", 誠信書房 (1973)